遼西地区先史文化の長期的変化に関する一考察－紅山文化と円筒土器文化の比較から－

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2018-05-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 業天, 唯正, Gyoten, Tadamasa
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050692

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

遼西地区先史文化の長期的変化に関する一考察
－紅山文化と円筒土器文化の比較から－

業天　唯正
（青森県教育庁文化財保護課）

1　はじめに

青森県をはじめ、東北地方には玦状耳飾、の字形石製品、三足土器、有孔石斧に代表される先史時代大陸部との影響関係が指摘される考古遺物が存在する。その影響関係については玦状耳飾の北方･江南起源説（藤田 1998、大坪 2013）、青銅製刀子の理化学分析（平尾ほか 2001）のように、系統的、直接的な交渉関係に帰納するアプローチがある。対して、機能的要請による玦状耳飾の独立発生（中村 1987）や石刀・石棒の骨刀との系譜関係（市川 2013）等、関連性について積極的に評価しない立場もある。直接的な系譜を認める如何を問わず、対象資料の増加に左右されるという制約から離れ、両者に共通する事象の背景についても具体化したうえで位置づける必要があるように思われる。そのためには、大陸・列島間の社会的変化について比較する視点が一助となるだろう。

日中の東北地方の新石器文化については、王（2002）が複数の共通点を指摘しており、その要因として自然環境と生業の類似性を挙げている。また、郭（1997）は中国東北地方と縄文文化の関係は、文化要素の相似や交流だけではなく、一つの大きな文化区系内外の文化的関係の総体として捉えるべきとした。さらには、福田（2009・2015）は、東北アジアの新石器文化は相似関係にあり、前 3 千年頃に多元的同時変化が生じていたとしている。

本稿では、こうした視座のもと、日中の東北地方の新石器文化・縄文文化を比較する。具体的には、文化要素の共通性、社会変化の方向性を明らかにするための基礎的作業として、中国の遼西地区を取り上げその遺跡数、建物規模等の長期的変化を整理し、北海道・東北地方の縄文文化との若干の比較を試みる。

2　遼西地区の長期的変化

遼西地区（図 1）の新石器文化は、大きく小河西文化→興隆窪文化→趙宝溝文化→紅山文化→小河沿文化といった変遷を辿る（中国社会科学院考古研究所 2010、趙賓福 2003）。暦年代ではおおよそ前 6,200 ～ 2,200 年の範囲であり、日本の縄文文化後期・晩期に併行する時期まで概ね含めると、夏家店下層・上層文化（前 2,200 ～ 600 年）までである。

遺跡数と竪穴建物規模の変遷の検討は本来的には人口変化を推定し、地域社会の展開過程を把握するものであるが、基礎資料やその操作に制約があるため、本稿では変遷の画期を見出すに留めたい。なお、竪穴建物数は、遺跡数に比して正式報告がなされた遺跡が少ないため、時期別増減までは触れない。特に、小河沿文化については、標本数が極めて少ないため、参考資料とし、遺跡数を除き分析時には考慮しない。

(1) 遺跡数

遼西地区全体の動向を示すデータではないものの、内蒙古東南部の赤峰地区に限定した遺跡数の変遷を図 2 に示す（赤峰中美聯合考古研究項目 2003、滕銘予 2009）。赤峰地区では、小河西文化期から趙宝溝文化

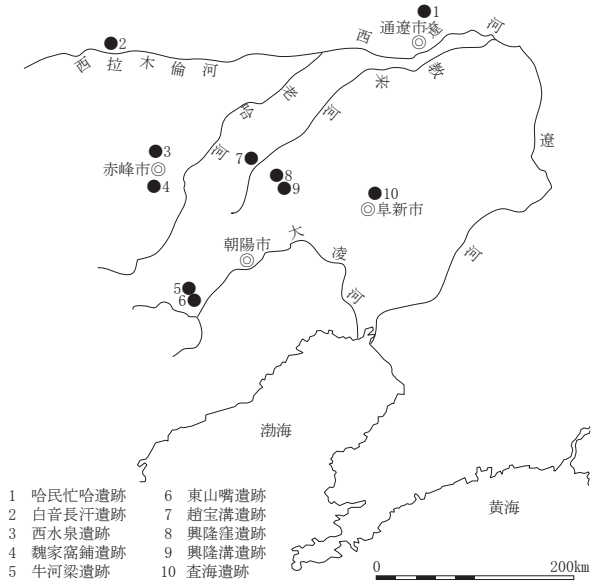

図1　遼西地区の主な遺跡

期にかけて緩やかな増加がみられ（44 → 107 → 130 遺跡）、紅山文化期に大幅に増加する（751 遺跡）。その後小河沿文化期になると激減するが（36 遺跡）、夏家店下層文化期に飛躍的に増加する（2,964 遺跡）。この変遷については、より小範囲の赤峰西南地区、さらには小流域単位の半支箭河中流域において認められることから、小地域単位でも同様の傾向を示すものと考えたい。各文化の存続期間を考慮しても、紅山文化期に遺跡数の大幅な増減が、夏家店下層文化期に遺跡数の急激な増加が生じている。

(2) 竪穴建物規模

長期継続した集落遺跡の竪穴建物規模及び形態の変化事例を検討したのち、遼西地区全体の変遷について概観する。

ア　赤峰市林西県白音長汗遺跡

白音長汗遺跡は、内蒙古自治区の東南部、西拉木倫河の北岸段丘上に位置する小河西文化から小河沿文化の集落遺跡である（内蒙古自治区文物考古研究所 2004）。集落の継続性については、細別時期では趙宝溝文化 1 ～ 3 期の竪穴建物跡が大きく欠落し、紅山文化前期・後期についても検出されていない。未調査遺構が存在しているため、竪穴建物跡の有無からは、長期間安定的に継続した集落であるか否かは不明であるが、出土遺物からは空白期間の存在が示唆される。

表 1・図 3 に検出された 87 軒の竪穴建物跡のうち、計測可能な 51 軒の長軸×短軸規模及び長軸 / 短軸比の時期別平均を示す[1)]。竪穴建物の規模は、各時期で竪穴建物の検出数に粗密があるものの、紅山文化期にかけて平均面積が減少する傾向が看取される。なお、平面形態は、方形を基調とするが、趙宝溝文化期に長方形を呈する。

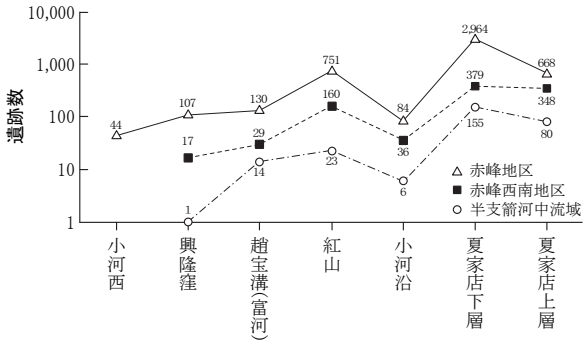

図2　内蒙古東南部における遺跡数の変遷

イ　遼西地区

表 2・図 4 に計測可能な 18 遺跡 160 軒の竪穴建物跡について、長軸×短軸規模及び長軸 / 短軸比の時期別平均を示す。竪穴建物跡の規模については、小河西文化期から興隆窪文化期にかけて増大し、趙宝溝文化期でやや減少するものの、紅山文化期には小型化が進んでいく。紅山文化期には 20 ㎡未満の建物が一定数存在しており、大型建物（ここでは便宜的に 100 ㎡以上としておく）と小型建物の規模の両極化が鮮明になったと言えるだろう。大型建物の出現は興隆窪文化期にはじまり、以後紅山文化期まで継続して存在している点にも注目される。また、趙宝溝文化期の長方形竪穴建物は該期に特徴的な建物と判断される。この現象は、興隆窪文化期から趙宝溝文化期にかけて方形から長方形へ、そして紅山文化期にかけて長方形から方形へと再度漸次的に変化したというよりは構造的変化であったと考えられる。なお、小河沿文化の竪穴建物跡は円形を呈するものが 2 軒確認されている。

(3) 石器組成

石器が生業活動に使用されたと仮定し、その組成の長期的変化について検討する。

対象資料は、(2) で分析を行った竪穴建物跡から出土した石器である。その主体となる礫石器について、機能別及び定形的器種に大別し[2)]、それらの構成比の時期別変遷を把握する。

表1　白音長汗遺跡における竪穴建物規模の変遷(1)

㎡	小河西	興隆窪文化 1期	興隆窪文化 2期	興隆窪文化 3期	趙宝溝文化 1期	趙宝溝文化 2期	趙宝溝文化 3期	趙宝溝文化 4期	趙宝溝文化 5期	過渡期	紅山文化 前期	紅山文化 中期	紅山文化 後期	小河沿
100				1										
80			1											
60			8	4				2						
40	1		13	5				2		2		4	1	
20	1			1								1	4	
計	2		22	11				4		2		5	5	

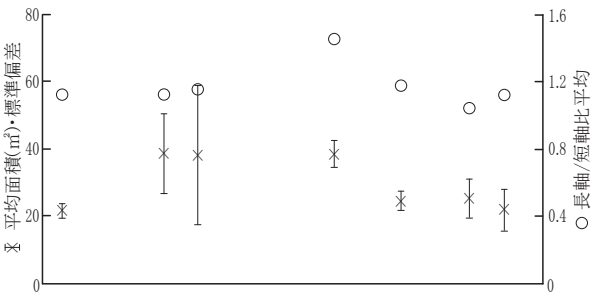

図3　白音長汗遺跡における竪穴建物規模の変遷(2)

大別時期では（図 5)、趙宝溝文化期から紅山文化期かけて土掘具の割合が大きく低下する。植物加工具は小河西文化から興隆窪文化期にかけて増加したのち、紅山文化期に至るまで大きな変動は見られない。細別時期でみると（図 6)、土掘具が相対的に減少している状況は紅山文化中・後期には生じているほか、植物加工具の割合の増加が小河西文化から興隆窪文化にかけて段階的に進行している。

(4) 小結

総括すると、下記の理由により大きな画期が紅山文化期に存在すると判断される。

ア　遺跡数の大幅な増減

小河西文化から趙宝溝文化まで遺跡数は漸次的に増加していたが、紅山文化になると大幅に増加したのち、小河沿文化になると急減する。この変化は紅山文化期に増加と減少が生じたことを意味する。具体的なデータはないが、現在まで発見されている紅山文化期の遺跡に限れば、紅山文化前期の遺跡は少なく、中期が最も多く、後期は中期より少ないとされる（劉 2015)。現在のところ、分析対象とした竪穴建物跡数も同様の傾向にある。

イ　竪穴建物規模の両極化

竪穴建物の小型化は紅山文化中期・後期に一般化することが従前から指摘されてきた（岡村 1995、王ほか 2017)。本稿でもその傾向を追認する結果となった。しかしながら、この現象は、趙宝溝文化の後半には開始していた可能性があり、むしろ一般的な竪穴建物規模の収斂が進むことにより、大型建物との規模が隔絶する現象に着目すべきである。

紅山文化の前段階、趙宝溝文化の大型・中型建物の性格については、甲元が論じている（甲元 2004)。甲元は石鋤・石鍬といった土掘具の出土から、大型・中型の竪穴建物は男性共用の特別な建物であり、「階層化以前の性差による社会的役割が意識された段階であったことを意味するもの」として位置づける。紅山文化期の大型竪穴建物は西水泉遺跡の 1 軒に限られ、出土遺物からその性格を論じることは現在では不可能であるが、少なくとも中型・小型建物との間で明確な差は認められない。このほか、集落内の建物分布も査海遺跡・白音長汗遺跡・趙宝溝遺跡に代表される伝統的な並列配置から、哈民忙哈遺跡・魏家窩鋪遺跡にみられる比較的大きな建物を中心とした配置へ変化して

表2　遼西地区における竪穴建物規模の変遷(1)

㎡	小河沿	興隆窪文化 1期	興隆窪文化 2期	興隆窪文化 3期	趙宝溝文化 1期	趙宝溝文化 2期	趙宝溝文化 3期	趙宝溝文化 4期	趙宝溝文化 5期	過渡期	紅山文化 前期	紅山文化 中期	紅山文化 後期	小河沿
160			1											
140												1		
120														
100		1		1				1						
80	1		5	1				1						
60	2	4	12	12				3			2			
40	2	5	12	18			2	4	2	2	3	9	2	
20	4	3	3	1			1	3			2	21	8	2
計	9	16	33	33			3	12	2	2	7	31	10	2

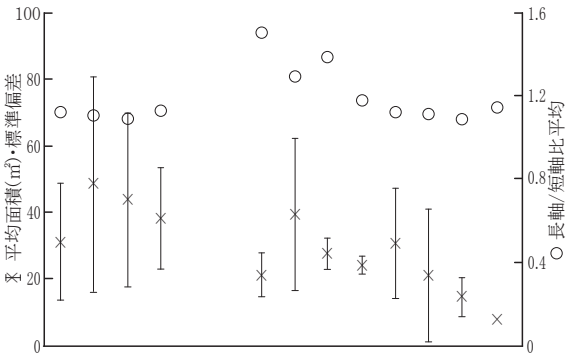

図4　遼西地区における竪穴建物規模の変遷(2)

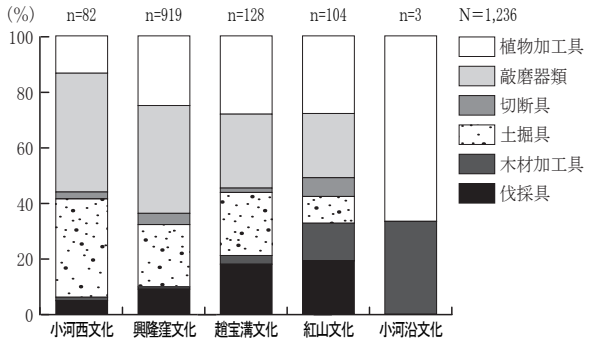

図5　遼西地区の礫石器組成（大別時期）

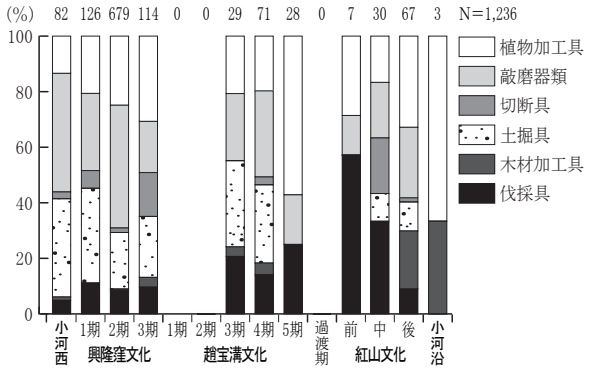

図6　遼西地区の礫石器組成（細別時期）

いることを加味すると（図 7）、紅山文化期に大型建物の性格が変化したことも想定する必要がある。

ウ　石器組成の変化

紅山文化では、身幅が狭い、深耕に適した新しい形態の石耜のほか、収穫具の有孔石刀・貝刀が出現する。このことから、一定の農耕段階にあった趙宝溝文化から紅山文化へ大きな飛躍があったと評価されているが（大貫 1998）、紅山文化の土掘具の割合の低さはどう捉えるべきであろうか。

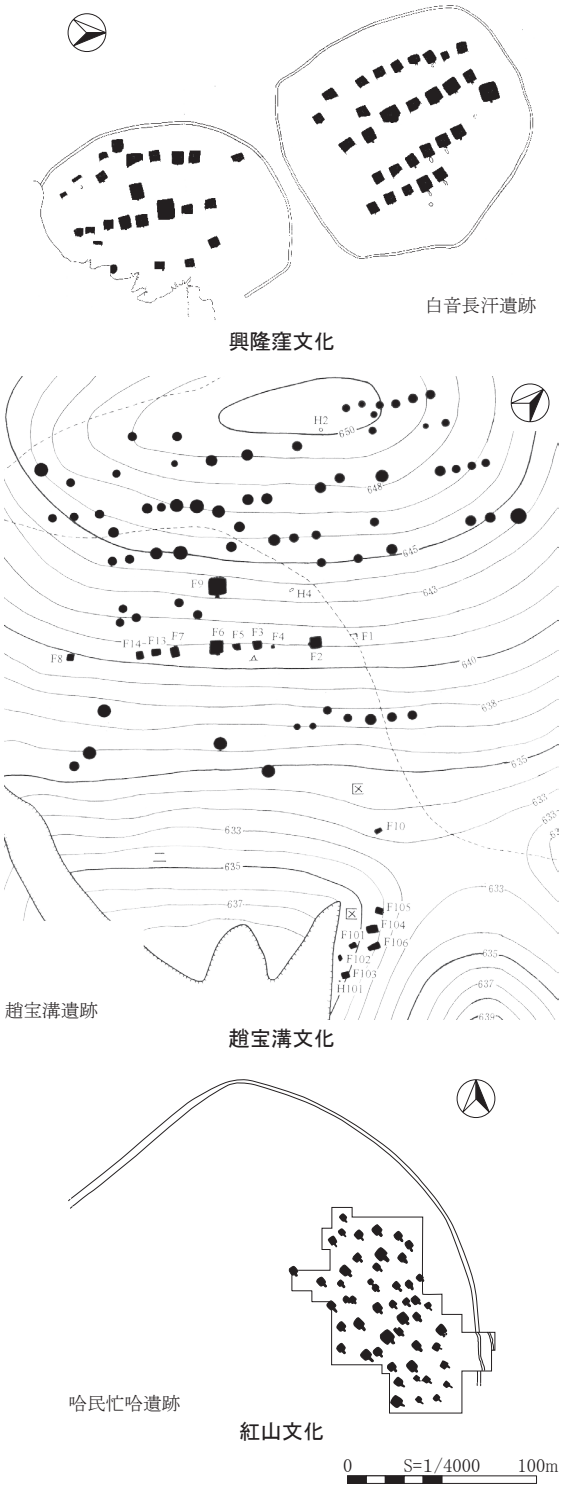

図 7　興隆窪文化から紅山文化の竪穴建物配置

建物跡出土石器から示唆される紅山文化における土掘具の少なさの理由としては耕作面積の広さと粗放的農業形態があげられている（徐 2006）。また、興隆窪文化に属する査海遺跡では、4 点の磨盤、磨棒の残存デンプン粒分析により禾本科のほかに、根茎類のデンプン粒が検出されている（遼寧省文物考古研究所 2012）。さらには、小河西文化から紅山文化の磨盤・磨棒を対象とした残存デンプン粒分析からは、紅山文化では小河西文化や興隆窪文化に存在するブナ科のドングリは見られず、栽培型のアワ類の比率が増加する一方で伴出するオオムギ属、マメ科の植物の割合が低下するという結果が得られている（馬ほか 2016）。これらからは小河西文化から紅山文化に至り、アワ類利用の比重が増す一方で堅果類、根茎類の採集が不活発になるという植物利用の集約化の存在が示唆される。なお、収穫具とされる石刀の割合が紅山文化に増加していることも関連する事象である可能性がある。

紅山文化以前の土掘具は耕起のほか、根茎類の採集にも使われていたが、植物利用の集約化、また深耕による生産性の向上（甲元 2008）と粗放的な農業形態という複合要因により土掘具の割合が減少したという推測が成り立つ。そのほかの要因として木材加工具が木製農具の生産と一定の相関があると仮定すると、石製から木製への置換という可能性も考えられる。

3　円筒土器文化における変化

紅山文化における遺跡数の増減、竪穴建物規模の縮小、石器組成にみられる特定の食料資源への集約化は、北海道・北東北に分布する円筒土器文化においても認められる。以下では、円筒土器文化圏における動向を既往の研究に基づいて概観する。両文化の年代的な併行関係は、紅山文化中期が円筒下層式期（縄文時代前期中葉～後葉、前 3,500 ～ 3,000 年）と紅山文化後期が円筒上層式期（縄文時代中期前葉～中葉、前 3,500 ～ 3,000 年）に相当する。

(1) 遺跡数

円筒土器文化の成立期である縄文時代前期中葉の

315 遺跡から、前期後葉の 613 遺跡をピークに、中期前葉の 495 遺跡、中期中葉の 311 遺跡と中期以降減少していく（青森県教育委員会 2016）。顕著な増減が見られるのは、前期中葉から前期後葉、中期前葉から中期中葉にかけてということになる。特に、遺跡数の減少する中期中葉には、集落の集約化と特定集落の拡大という傾向が認めれている。

（2）竪穴建物規模

円筒土器文化全域を通時的に扱ったデータはないが、前期中葉から中期中葉においては三内丸山遺跡のように竪穴建物の小型化が見られる地域とそうではない地域が存在する（岡田 1998、羽生 2002）。八戸市域では中期後葉から後期中葉にかけて集落の分散（集落数の増加）とともに規模の収斂が認めれている（市川 2012）。全体の傾向として青森県を例とすると、一部の地域を除き、竪穴建物規模の収斂が見られるのは中期後葉以降であった。しかし、中期後葉から後期前葉までは人口規模に大きな変動はなかった（関根 2014）との指摘がある点に留意する必要がある。

（3）石器組成

剥片石器では北東北の円筒下層式期に植物に対して用いられたとされる石匙が中心となるが、以降、石匙は減少し、円筒上層式期には石鏃が高い割合を占めるようになり、動物を対象とした石器が増加することが使用痕分析から明らかになっている。（髙橋 2016）。礫石器を含めた組成からみると、三内丸山遺跡では、中期前葉・中葉（円筒上層ｂ～ｄ式期）に磨石が出土石器の半数以上を占めるようになることから、生業の多様性が減少し、植物質食料への依存度が高まったことが指摘されている（羽生 2015）。花粉分析結果からも、前期中葉から中期にかけて樹木花粉ではクリが優先する現象がみられ（青森県教育委員会 2017）、前期中葉から中期にかけては、特定の食料資源への集約化が顕在化する。

4　まとめ

両地域における長期的な変化を比較すると、大きく 3 点指摘される。

(1)　遺跡数の増加

紀元前 4 千年紀前半に見られる。紅山文化については細別時期の変遷についてより詳細な検討が必要であるが、紅山文化の中期、円筒土器文化では前 4,000 ～ 3,500 年頃まで集落の拡大期と評価される。

(2)　遺跡数の減少

紅山文化では紀元前 3 千年紀後半、円筒土器文化では、前 3,500 年頃まで集落の減少期と考えられる。

（3）生業の集約化

紅山文化では、アワ類利用への集約化、円筒土器文化では特定の食料資源への集約化が認められる。

こうした共通項は、東北アジアにおける「多元的同時変化」として概ね理解されるが、特に紀元前 3 千年紀後半の集落数の減退局面において、紅山文化では牛河梁遺跡（遼寧省文物考古研究所 2012b）や東山嘴遺跡（郭ほか 1984）において祭祀遺構が構築され、円筒

図8　紅山文化と円筒土器文化の位置関係

土器文化では大型掘立柱建物や環状配石墓が出現するなど、社会の複雑化が進行することに注目される。

大局的な比較に留まったが、円筒土器文化圏での竪穴建物規模の地域性の存在から示唆されるように、遼西地区では、小地域単位を対象に、その他の考古学事象とともに細別時期での検討を行っていくことにより、遺跡数の増減の実態や、社会複雑化の要因についてより具体的な検討を行っていくことができるものと考える。

今回は中村慎一、中村誠一両先生の還暦記念号に寄稿させていただく機会を与えていただき、感謝いたします。中村慎一先生にご指導いただいていた大学院在学中には、内蒙古自治区赤峰市の紅山文化の遺跡において発掘調査に参加する機会を得ました。そして現在は、日本の新石器時代の遺跡において奉職する機会を得ています。こうした繋がりを踏まえて今回のテーマを設定した次第ですが、研究ノートに満たない内容となってしまい、日頃の不勉強を恥じ入るばかりです。

最後になりましたが、両先生のご還暦をお祝い申し上げるとともに、益々のご活躍を祈念いたします。

註

1）細別時期については、遼寧省文物考古研究所（2012a）、陳（2008）、劉（2015）の報告・研究を参考とした。遼寧省文物考古研究所（2012）では、査海－興隆窪文化を4期区分しているが、本稿では1期を小河西文化として扱った。

長軸・短軸は出入口施設を除く掘方上端の最大計測値であり、面積はそれらを乗じたため、床面積を示さない。なお、対象とした個別の建物跡については、末尾の発掘調査報告書を参照されたい。

2）大別した礫石器の種別は以下の通りである。

植物加工具（磨盤、磨棒、石杵、石臼）、敲磨器類（磨石、斧形器、研磨器、石餅形器等）、切断具（石刀類）、土掘具（石鏟、石鋤、石耜）、木材加工具（石鑿等）、伐採具（石斧）

参考文献（五十音順）

青森県教育委員会 2017『三内丸山遺跡 44』総括報告書第1分冊

青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用推進室 2016「円筒土器文化総合研究データベース作成」『三内丸山遺跡年報』16、63-74 頁

市川健夫 2012「八戸市内における縄文時代の竪穴住居数と居住規模」『研究紀要』第1号、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館、11-20 頁

市川健夫 2013「石棒・石刀『季刊考古学』第 125 号、45-49 頁

王巍 2002「第7章第3節　東北地方の先史文化」『青森県史別編　山内丸山遺跡』青森県、359-400 頁

王秀峰・崔向東 2017「從聚落形態看紅山文化中晚期的社会分化」『渤海大学学報』2017 年第1期、21-26 頁

大坪志子 2013「玦状耳飾」『季刊考古学』第 125 号、50-54 頁

大貫静夫 1998『東北アジアの考古学』同成社

岡田康博 1998「東日本の縄文文化」『季刊考古学』第 64 号、31-35 頁

岡村秀典 1995「4　遼河流域新石器文化の居住形態」『東北アジアの考古学研究』同朋社出版、173-211 頁

郭大順 1997「5　玉之路和縄紋人的文明信息－日本北陸、東北地区文物考察」『東北亜考古学研究』文物出版社、211-216 頁

甲元眞之 2004「中国東北地方の先史時代社会」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会、289-306 頁

甲元眞之 2008『東北アジアの初期農耕文化と社会』同成社

徐子峰 2006「紅山文化と中国北方文明の起源について」『人文社会科学研究所年報』№.4、敬和学園大学、133-145 頁

成璟瑭・塔拉・曹建恩・熊増瓏 2014「内蒙古赤峰魏家窩鋪新石器時代遺址的発見与認識」『文物』2014 年第 11 期、47-52 頁

赤峰中美聯合考古研究項目 2003『内蒙古東部（赤峰）区域考古調査階段性報告』科学出版社

関根達人 2014「青森県における縄文時代の遺跡数の変遷」『第四紀研究』54 巻 4 号、193-203 頁

孫永剛・賈鑫 2016「遼西地区紅山文化時期生産方式及相関問題研究」『遼寧師範大学学報』（社会科学版）第 39 巻第 4 期、129-134 頁

髙橋哲 2016「盛土出土の石器組成について－北盛土出土石器を中心として」『三内丸山遺跡年報』19、青森県教育委員会、22-41 頁

中国社会科学院考古研究所 2010『中国考古学　新石器時代巻』中国社会科学出版社

趙賓福 2003『東北石器時代考古』吉林大学出版社

陳国慶 2015「試論趙宝溝文化」『考古学報』2008 年　第 2 期、121-140 頁

滕銘予 2009『GIS 支持下的赤峰地区環境考古研究』科学出版社

中村慎一 1987「中国出土の玦状製品」『東南アジア考古学

会会報』第 7 号、3-5 頁
羽生淳子 2002「三内丸山遺跡の「ライフ・ヒストリー」：遺跡の機能・定住度・文化景観の変遷」『国立民族学博物館調査報告』第 33 巻、161-183 頁
羽生淳子 2015「歴史生態学から見た長期的な文化変化と人為的システム：縄文時代前・中期の事例から」『第四紀研究』54 巻 5 号、299-310 頁
福田正宏 2009「東北アジアのなかの縄文文化」『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究発表資料集』127-132 頁
福田正宏 2015「東北アジアのなかの東北先史文化」『東北の古代史 1　北の原始時代』204-248 頁
藤田富士夫 1998「日本列島の玦状耳飾の始原に関する試論」『東亜玉器』(第 2 冊) 香港中文大学考古藝術研究中心、312-321 頁
平尾良光ほか 2001「山形県三崎山出土青銅製刀子の鉛同位体比」『日本文化財学会第 18 回大会研究発表要旨集』44･45 頁
馬志坤・楊曉燕・張弛・孫永剛・賈鑫 2016「西遼河地区全新世早中期粟類植物利用」『中国科学：地球科学』第 46 巻第 7 期、918-925 頁
劉国祥 2015『紅山文化研究』科学出版社
遼寧省文物考古研究所 2012a『査海　新石器時代聚落遺址発掘報告』文物出版社

発掘調査報告書（アルファベット順）

郭大順・張克挙 1984「遼寧省喀左県東山嘴紅山文化建築群址発掘簡報」『文物』1984 年第 11 期、1-11 頁
遼寧省博物館･昭烏達盟文物工作站･敖漢旗文化館 1977「遼寧敖漢旗小河沿三種原始文化的発見」『文物』1977 年第 2 期、1-12 頁
遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・朝陽県文物管理所 2004「朝陽小東山新石器至漢代遺址発掘報告」『遼寧省道路建設論集 (2003)』遼寧民族出版社、1-94 頁
遼寧省文物考古研究所 2012b『牛河梁－紅山文化遺址発掘報告 (1983 ～ 2003 年度)』文物出版社
内蒙古文物考古研究所 1994「克什克騰旗南台子遺址発掘簡報」『内蒙古文物考古文集』第 1 輯、97-105 頁
内蒙古文物考古研究所 1994「巴林左旗友好村二道梁紅山文化遺址発掘簡報」『内蒙古文物考古文集』第 1 輯、106-123 頁
内蒙古自治区文物考古研究所 2004『白音長汗－新石器時代遺址発掘報告』科学出版社
内蒙古文物考古研究所 2005「内蒙古林西県水泉遺址発掘簡報」『考古』2005 年第 11 期、19-29 頁
内蒙古文物考古研究所・赤峰市博物館 2008「元宝山哈喇海溝新石器時代遺址発掘報告」『内蒙古文物考古』2008 年第 1 期、1-19 頁
内蒙古文物考古研究所 2012「内蒙古科左中旗哈民忙哈新石器時代遺址 2012 年的発掘」『考古』2015 年第 10 期、25-45 頁
内蒙古文物考古研究所・科左中旗文物管理所 2012「内蒙古科左中旗哈民忙哈新石器時代遺址 2010 年発掘簡報」『考古』2012 年第 3 期、14 -30 頁
内蒙古文物考古研究所･吉林大学辺疆考古研究中心 2012「内蒙古科左中旗哈民忙哈新石器時代遺址 2010 年的発掘」『考古』2012 年第 7 期、25-45 頁
内蒙古文物考古研究所 2013「翁牛特旗老牛槽溝紅山文化遺址発掘簡報」『内蒙古文物考古文集』第 4 輯、129-171 頁
内蒙古文物考古研究所・赤峰市博物館・翁牛特旗博物館 2013「翁牛特旗二道窩鋪遺址発掘簡報」『内蒙古文物考古文集』第 4 輯、89-128 頁
楊虎・林秀貞 2009「内蒙古敖漢旗小河西遺址簡述」『北方文物』2009 年第 2 期、3-6、12 頁
楊虎・林秀貞 2010「内蒙古敖漢旗紅山分化西台類型遺址簡述」『北方文物』2010 年第 3 期、13-17 頁
中国社会科学院考古研究所内蒙古工作隊 1985「内蒙古敖漢旗興隆窪聚落遺址発掘簡報」『考古』1985 年第 10 期、865-874 頁
中国社会科学院考古研究所内蒙古工作隊 1987「内蒙古敖漢旗小山遺址」『考古』1987 年第 6 期、481-506 頁
中国社会科学院考古研究所内蒙古工作隊 1997「内蒙古敖漢旗興隆窪聚落遺址 1992 年発掘簡報」『考古』1997 年第 1 期、1-26 頁
中国社会科学院考古研究所 1997『敖漢趙宝溝』中国大百科全書出版社
中国社会科学院考古研究所内蒙古工作隊・敖漢旗博物館 2000「内蒙古敖漢旗興隆溝新石器時代遺址調査」『考古』2000 年第 9 期、30-48 頁
中国社会科学院考古研究所内蒙古第一工作隊 2004「内蒙古敖漢旗興隆溝聚落遺址 2002 ～ 2003 年的発掘」『考古』2004 年第 7 期、3-8 頁